

第 35 回加藤周一文庫公開講読会「『続 羊の歌』を読む」

——第七章「南仏」——

立命館大学博士後期課程

蛸子 良風

◎梗概

本章「南仏」では、加藤が国際ペン会議（1952 年、フランス・ニース）に参加した際の旅の出来事がまとめられている。本章の大部分（第 11 段落まで）では、ペン会議やそこで加藤が出会った人々の様子が描写され、残りの部分（第 12 段落から第 14 段落）では、南仏の自然の風景やポン・デュ・ガール水道橋に関する加藤の美学的見解が述べられる。

各段落の構成は以下の通りである。

第 1 段落：ルネ・アルコスと国際ペン会議に参加した経緯の説明。

第 2 段落：ペン会議での日本人作家の様子。

第 3 段落：ジュール・ロマンやその取り巻き作家たちの会議での振る舞い。

第 4 段落から第 6 段落：フラン・マズレールの人柄や片山敏彦に関する彼との会話。

第 7 段落：イギリス人作家とのウィットに富んだ会話の様子。

第 8 段落から第 11 段落：一緒に宴会を抜け出した若い婦人について。

第 12 段落から第 14 段落：南仏の自然の風景やポン・デュ・ガール水道橋について。

多くの人物との会話を取り上げられているのが本章の特徴であるが、本章の随所で描写される南仏の美しい風景にも注目すべきだろう。第 12 段落以降では、南仏の風景と日本の風景が比較され、両者の「感覚的秩序」が対極に位置すると論じられる。加藤の芸術論では日本と西洋との比較が重要な役割を果たしているが、本章からは、南仏での経験がその着想源の一つになっていることも読み取れるだろう。

◎第 1 段落（アルコスと共に国際ペン会議ニース大会へ向かう）

老齢の詩人は、もはやひとり旅を好まなくなっていたが、私が同行すれば、国際ペン・クラブの会議を機会に、しばらく初夏のパリを離れてみたいといった。会議は南仏のニースであるはずで、私はまだ南仏へ行ったことがなかったし、国際会議というものに出席したこともなかった。私たちはリオン停車場から急行で出発した。（『続 羊の歌』、岩波新書、1968 年、68 頁）

- ・老年の詩人というのは、前章から登場しているルネ・アルコス。
- ・国際ペン・クラブの会議というのは、1952 年 6 月 14-19 日に開催された第 24 回国際ペン・ニース大会のこと¹。

¹ 日本ペンクラブ小史 (<https://japanpen.or.jp/about/shoushi/>) を参照。小松清（代表）と丸岡明が派遣され、その他には（本文中でも言及されているように）田村と平林が出席した。テーマは「現代青年と文学」。

…この会議には日本の作家や評論家も出席しており、加藤はそこで田村泰次郎や平林たい子と会っている。

◎第2段落（会議に参加した日本人作家の様子）

「南」の太陽は烈しく、地中海は、ブルヴァール・デ・ザングレの並木の向うに、まぶしく輝いていた。その会議には、早くも日本から何人かの作家が来ていて、私は久しぶりに日本語の会話をたのしんだ。堂々たる体格の田村泰次郎氏は、しきりに汗をふきながら、何度氷を注文しても、給仕が別のものを持って来るのは、どういうわけか、とこぼしていた。戦後「肉体の門」を書いて洛陽の紙価をたかめた小説家のために、私は氷を注文し、その急場を救った。田村氏は実にうまそうにその氷を飲んでいて。和服の平林たい子氏は、「来て見ておどろきましたよ」と私にいった。午前中が会議で、午後は物見遊山に出かけることが多い。もう少し真剣な討論をするのかと思っていたが、あてが外れたというのであった。また平林氏と同宿の、どこかの国の代表が、女を部屋に連れこんで、会議に出て来ようとしめないのは、見るにたえぬということでもあった。私は平林氏の観察の鋭さに感心した。（『続 羊の歌』、68 頁）

- ・ここでは会議での田村と平林の様子が語られている。
- ・田村泰次郎の「肉体の門」は 1947 年 3 月に「群像」で発表され、単行本は 120 万部を超える大ヒット作になった。
 - …ベストセラー作家の急状を救えたことが加藤は嬉しかったのだろう。
- ・平林たい子は、会議で真面目な討論がされないことについて批判的な意見を述べる。
 - …「平林氏の観察の鋭さに感心した」と書かれているのは、加藤の目から見ても会議で語られていることが「無内容」に思えたからだろう（次段落を参照）。

◎第3段落（「大家」の役割を演じるジュール・ロマン）

会場ではフランスの作家たちが弁舌を振っていた。殊におくれて現れた学士院会員、ジュール・ロマンは、すばらしいフランス語で、全く無内容な演説をするのに、比類のない熟練と才能を示した。それは壮観としかいいようのないものであった。演説のあとでも、大勢の男女にとりかこまれて、大小説家は芝居がかった「大家」の役割を、実に見事に演じつづけていた。「紹介しようか、彼は古い友だちだ」と同行のアルコス氏はいった。しかしもっと正確には、「友だちだった」というべきであったのだろう。友だちならば、こちらから握手をしにゆくまでもなく、向うからとり巻きを離れてやって来るはずだろう、と私は考えた。作家と、作家になろうとした人と、作家になりたい人とが、同じ部屋のなかで、それぞれ勝手なことを喋り、煙草と香水と人いきれの混じった空気が、騒然とわきたっていた。（『続 羊の歌』、69-70 頁）

- ・ジュール・ロマン（1885-1972）は僧院派の詩人・作家の一人で、ユナニスム（一体主義）²と呼ばれる文学理論ないしは神秘思想を提唱した。
 …ロマン曰く、「ユナニスムには、そのような〔哲学体系のような〕堅固な構造も輪郭もない」し、「一貫した論理を主張するものでもない」³。
- ・加藤は彼について、「ジュール・ロマンは、すばらしいフランス語で、全く無内容な演説をするのに、比類ない熟練と才能を示した」と（皮肉混じりに）酷評している。
 …その理由を鷲巢は以下のように説明する。
 …「ユナニスムは非体系的で、気宇壮大な表現が見られる。そういう特徴が「すばらしいフランス語で、全く無内容な演説」という加藤の批評となる」⁴。
- ・また加藤の目には、ロマンだけでなく会場にいる作家やそれに類する人が皆それぞれに勝手なことを喋っているように見えた。
 …第4段落では、そのような作家たちが「何もいわぬためになるべく多くの言葉を駆使しようとしている作家たち」（70頁）と評される。
 …「文学者たちのパーティーには「作家と、作家になろうとした人と、作家になりたい人とが」集まり、訳知り顔に会話が交わされるのも、東西変わりがないようである」⁵。
- ・アルコスは「彼は古い友だちだ」と言って「大家」であるロマンに加藤を紹介してあげようと気を回したが、加藤はそんなアルコスの言動を冷ややかに分析している。
 …「もっと正確には、「友だちだった」というべきであったのだろう」。
 …加藤は「大家」の知遇を得ることに興味がなかったため、アルコスの提案の内容よりも、むしろ彼が見栄を張っているように見えたことが気になったのだろう。
- ・この段落からは、「大家」の役割を演じるロマンや作家たちの社交に対して、加藤があまりいい印象を持っていなかったことが読み取れる。
 …それとは対照的に、「しかし」から始まる第4段落以降では、芸術家フラン・マズレールが好意的な仕方で描写されている。

² 加藤和孝によると、ロマンは、精神を「それぞれの人間がその一部分を内包しているひとつの大きな広がりを持った連続体」とみなし、そのような心的な連続体を「ユナニム」（一体的なもの）と呼ぶ。ユナニスムとは、そのようなユナニムの存在を信じ、それと合体の可能性を信じる一般的な姿勢のことである（加藤和孝、「ユナニスムについて：ジュール・ロマンの講演から」、『独仏文学語学研究』（1）、1972年、51-53頁）。

³ 加藤和孝による«Petite Introduction à l'Unanimisme»の抄訳より引用（前掲論文、49頁）。亀甲括弧内は引用者が補った。

⁴ 鷲巢力、『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』、岩波書店、2018年、360-361頁）。

⁵ 鷲巢力、前掲書、361頁。

◎第4段落（ペン会議から立ち去るフラン・マズレール）

しかし私はまたニースでフラン・マズレールにも会った。フラマンの芸術家は、まだ少しも年老いていず、彼自身の版画のなかの人物のように、年齢を超越し、おそらく時代を超越して、飄々とひとりの道を歩いているようにみえた。その長身に粗服をまとい、運動選手のように軽快に、大股に、白髪を海の風になびかせ——そのとき彼の周囲からは、国際会議やブルヴァール・デ・ザングレの豪華な建物や、身体をなるべく多く露出させながら同時に着飾ろうとしている女たちや、何もいわぬためになるべく多くの言葉を駆使しようとしている作家たちが、煙のようにかき消えて、ただ一本の白い道だけがまっすぐにつづいていた。「よい風だ、風に向って歩くことを私は好む」と彼は低い太い声でいった。（『続 羊の歌』、70 頁）

- ・フラン・マズレール（1889-1972）はフランスで活躍したベルギー出身の木版画家で、言葉のない「絵の小説」という作風で知られる。

…代表作は 1919 年の『私の時祷書』（原題：Mon livre d'heures）⁶。

…英語版（英題は *Passionate Journey*）の解説では以下のように評されている。

> 「当時の現実主義的な物語の多くと対照的に、『情熱的な旅』『私の時祷書』の主人公は、社会的な制約を超越して人間主義的な次元に生きている」⁷。

…加藤曰く、マズレールは「彼自身の版画のなかの人物のように、年齢を超越し、おそらく時代を超越して、飄々とひとりの道を歩いているようにみえた」。

> 加藤が描くマズレール像は、『私の時祷書』の主人公の姿にも重なる⁸。



⁶ マズレールは中世の祈禱書に見られる木版画に強い関心を寄せており、『私の時祷書』というタイトルも中世の富裕層の間で流行した装飾写本『時祷書』（*Livre d'heures*）から取られている。下記の英語版の解説を参照。Beronä, David. "Introduction." In Beronä, David (ed.), *Frans Masereel: Passionate Journey: A Vision in Woodcuts*, Dover Publications.

⁷ Beronä, David、前掲書。

⁸ 物語の概要は下記の通り。列車で遠方からやってきた若い男が、見知らぬ街に次第に溶け込んでいき、悲喜交々さまざまな出来事に関わっていく。何気ない日常の描写が作品の大半を占めており、鳩に餌をやったり、怪我人を助けたり、街の子どもの面倒を見たり、酒場で男と殴り合ったり、風俗嬢に交際を申し込んだりなど、主人公と街の人々の生活がスナップショットのような手法で活写される。作品全体を通じて、主人公は親切で勇敢な

：飾り気がなく堂々としており、社交場での立場などは気にも留めない
飄々とした人物。

：第4段落で描かれたジュール・ロマンとは対照的である。

・マズレールが歩くと、虚飾に満ちたペン会議のすべてが「煙のようにかき消えて、ただ一本の白い道だけがまっすぐにつづいていた」。

…「身体をなるべく多く露出させながら同時に着飾ろうとしている女たち」／「何もいわぬためになるべく多くの言葉を駆使しようとしている作家たち」

＞会場の女たちは生身の自己を衣服で着飾り、作家たちは自己の真意を言葉で覆い隠そうと躍起になっている。

＞女も男も衣服や言葉で現実の自己を覆い隠し、魅力的な虚像を演じている。

…そのように自己を取り繕う参加者だけでなく、豪華な建物やペン会議そのもののさえもが、マズレールと比べれば実体のない「煙」のようなものだった。

＞粗服を身にまとい、軽快に、大股でひとり歩みゆくマズレールの姿だけが、加藤に鮮烈な印象を残し、他のものは煙のようにかき消えてしまう。

・作家たちのさまざまな思惑が渦巻くペン会議での社交よりも、「風に向って歩くこと」をマズレールは好んだ。

…「「よい風だ。風に向って歩くことを私は好む」と彼は低い太い声でいった」。

…前段落の「煙草と香水と人いきれの混じった空気が、騒然とわきたっていた」という描写と対比的に読むことができる。

◎第5段落（「旧港」）

画家マズレールは、ニースの「旧港」を見下ろす建物の高いところに住んでいた。昇降機はなく、階段の踊場は足の下で軋んだ。そのせまい住居のなかには、あらゆる壁を蔽って書棚があり、いくつかの油絵が仕事の途中で画架にかけられていた。窓を左右に開いて、身体をのりだすと、眼下に「旧港」の水と、無数の漁船の帆柱がみえ、防波堤の向うに地中海が光っていた。「旧港」の水際には、黄色い壁の古い建物もならんでいて、その前のせまい舗道には、買物かごを下げた女や、労働者たちが、右往左往していた。そこでは町が生きていた。「プロムナード・デ・ザングレに行くことはほとんどない」と彼はいった、「今度出かけたのは君たちが来ていたからだ」。（『続 羊の歌』、70-71 頁）

・マズレールが住む「旧港」は、プロムナード・デ・ザングレとは対照的。

…プロムナード・デ・ザングレ（イギリス人の遊歩道）は、イギリス人が出資して作った海岸沿いの遊歩道で、高級ホテルや高級邸宅が立ち並ぶ。

飾り気のない男で、時に型破りな行動に出るが内省的な性格も併せ持つ。Beronă の解説によると、主人公のモデルはマズレール自身とマルクス主義の伝記作家アンリ・ギルボーで、内省的な性格がマズレールに、型破りな性格がギルボーに由来する。

＞「今度出かけたのは君たちが来ていたからだ」とあるので、ペン会議の参加者が集ったのはプロムナード・デ・ザングレだった推測される。

…「一方、「旧港」はニースの街の東部にあり、あたりはひなびた感じが残る地区である。「プロムナード・デ・ザングレに行くことはほとんどないが「旧港」の居酒屋で地元の人と親しく交わるマズレールの生き方が鮮やかに描かれる」⁹。

＞マズレールと地元の人との交流の描写は第6段落はじめ。

◎第6段落（マズレールとその友人）

「旧港」の居酒屋では、仕事衣のままで飲んでいた漁夫や労働者たちが、マズレールを識っていて、彼が入ってゆくと、眼で挨拶をしたり、言葉をかけたりした。彼は何人かと握手をし、老人の肩をたたき、短い言葉を交わし、冗談をいって相手を笑わせていた。そこでは、もはや、彼はひとりではなかった。私はその小さな港町の風景のすべてを好んだ。陽に焼けた男たちの顔も、年とった女の額の深い皺も、潮の香と石油の匂いの入りまじった空気も、居酒屋の卓子も粗末な椅子も。「それならば、また明日会おう」とマズレールはいった。そのとき彼は油で風景画を描いていた。「抽象絵画はつまらない、世界は美しいではないか」。またパリには何の興味ももっていなかった。「都会はいよいよ住みにくくなってゆく。何か浅薄でないものがそこにあるだろうか」。ドイツへは展覧会のために、ときどき出かけるが、他の何処へ出かけようとも思わない、と彼はいった。しかしそれは「引退」というものではなかった。仕事を続けていたばかりでなく、世界の出来事に強い関心をもっていた。また「人間嫌い」ということから遠かった。その町と町の人々を好んでいたばかりでなく、彼の言葉には一種の心のあたたかさが溢れていた。「片山はどうしているだろうか」とマズレールは私と町を歩いているときに、突然、いい出した。それは彼が二〇年も前に会った青年片山敏彦のことである。彼はその頃、ロマン・ロランの近くにいたのだ。一体その頃のロマン・ロランの周辺には、何があったのだろうか、と私は考えた。後年の詩人片山敏彦の側からいえば、それは「精神の交わり」であり、「星たちの集り」であった。しかしそういう言葉で表現された説明は、それを聞いたときに、私には何のことかよくわからなかったし、またおそらく誰にもわからなかったにちがいない。しかしまたそれが単なる言葉の綾にすぎなかったとしたら、マズレールが、二〇年後に、フランス語もろくに喋らなかつた日本の青年を、突然思い出すはずはなかつたろう。「片山はその後一度も手紙をくれない……」とマズレールはいった。それは二〇年まえの出会いが、詩人片山にとって、ありふれたものだったからではなく、あまりに重大で決定的なものであったからであろう。相手を忘れたからではなく、あまりに尊敬する相手と話し合うことのできる話題を、自分の住む世界のなかにみつけることができなかつたからであろう。私は、いくさの間も、マズレールの版画集を開きながら、軍国主義を呪い、超

⁹ 鷲巣力、前掲書、362頁。

国家主義を批判し、遠い昔、遠いスイスの山中で、ロマン・ロランとマハトマ・ガンディーとの出会った日を讃美してやまなかった詩人を、思い出した。二〇年間も、たったひとりで、東京に生きのびることができるほどの力を、フランスでの友人たちは、詩人にあたえることができた。したがって、彼らに手紙を書くことはできなかったし、戦後交通がひらけても、彼らをフランスに訪ねることはできなかった。なぜマズレールの友人が一度も手紙を書かなかったか——私にはその理由があまりにもよくわかっていた。だから私が彼にその理由を説明することはできなかった。日本へ帰って後、私も彼に手紙を書いたことがない……（『続 羊の歌』、71-72 頁）

- ・「旧港」の居酒屋の地元の人とマズレールは親しい間柄のようで、「そこでは、もはや、彼はひとりではなかった」。
 - …第4段落の「飄々とひとりの道を歩いているようにみえた」との対比。
 - …マズレールは、ペン会議の作家たちとの社交ではなく、仕事着のまま居酒屋で飲んでいる「旧港」の漁夫や労働者たちとの素朴な交流を好んでいた。
 - ＞加藤自身も、「旧港」を気に入ったようである。
- ・マズレールは具体的な自然を描くことを好み、抽象画家が描く世界やパリのような都会は空疎で軽薄だと感じていた。
 - …だが、抽象画や都会の様子に興味がないからといって、彼は仕事に対する情熱や世界の出来事に対する関心を失ったわけではない。
 - …また、「風に向って歩くこと」を好みペン会議から立ち去ったからといって、彼が「人間嫌い」だったというわけでもない。
 - ＞「その町と町の人々を好んでいたばかりでなく、彼の言葉には一種の心のあたたかさが溢れていた」。
- ・詩人の片山敏彦は1929年6月から1931年3月までヨーロッパに滞在し、ロマン・ロランやその周辺のアルコス、マズレールらと交流があった。
 - …片山が言うには、彼はロランの周辺で「精神の交わり」、ないしは「星たちの集い」を経験した。
 - ＞マズレールが片山のことをよく覚えていたことから見ても、これは単なる言葉の綾ではなく、実際そういう交流があったのだろうと加藤は推測する。
- ・マズレールは「片山はその後一度も手紙をくれない……」と残念がっていたが、尊敬する相手に手紙が書けないという片山の気持ちが加藤にはよく分かった。
 - …片山は、ロラン、アルコス、マズレールらの詩集や画集を心の支えにして、軍国主義に染まった東京をたったひとりで生き延びることができた。
 - …しかし片山は、「あまりに尊敬する相手と話し合うことのできる話題を、自分の住む世界のなかにみつけることができなかった」。

…加藤自身も、「日本へ帰って後、私も彼に手紙を書いたことがない……」と言っているが¹⁰、その理由は片山と同じだろうか。

＞片山が手紙を書かなかったことについて、「私にはその理由があまりにもよくわかっていた」と本文中では書かれている。

＞帰国後の加藤も、片山と同様、マズレールのような「星たち」の住む世界と、自分の住む世界との違いを感じて手紙を書かなかったのだろうか。

・片山が手紙を書かなかった理由について、加藤はマズレールに説明することができなかったとあるが¹¹、なぜ説明できなかったのか。

…後年加藤は、マズレールとの会話再び取り上げ、以下のように書いている。

＞「「カタヤマ？ われわれはみんな彼が好きだった」とマズレールはいった、「しかし、日本へ帰ってから一度も手紙をくれないのは何故だろう？」——その「何故」を説明するためには、一人のカタヤマではなく、一つの文化を説明しなければならなかっただろう、私がそのなかで生きてきた一つの文化を」¹²。

…鷺巣はこれを受けて以下のように要約する。

＞「要するに、文化の違いだというのである。敬して遠ざける文化と敬して近づく文化との違い。片山は敬すれば敬するほど近づけなくなる」¹³。

…尊敬しているなら近づいてくるはずだと考える文化圏の人に、尊敬すればするほど近づけなくなる片山の気持ちを説明することは困難だった。

◎第7段落（イギリス人作家との出会い）

しかし私はまた、国際ペンの集りをたのしまなかったのではない。ニースの市長は、私たちを、海と町を見はるかす丘の上の庭園に招待した。その無数の花壇や噴水や植込みのかげの小径は、巧みに照明されていて、野外にしつらえた卓子には、あり余る酒と山海の珍味があった。私はその豪奢に感心し、卓子の会話に退屈した。酒の廻った外国人相互のやりとりが、傍から聞いていて、わかりにくかったということもある。またたとえ言葉を理解できても、話の内容が仲間の噂や出版社の内輪話で、その世界に住んでいない私の興味をひかなかったということもある。私はしばらくアルコス氏を彼の盃とフランス人の仲間に任せて、庭園を散歩することにした。そのとき露台で、ひとり、町の灯を眺めていた

¹⁰ 他方で、鷺巣は前掲書 362 頁で、「マズレールと加藤は帰国後も親交を続けた」と書いており、『続 羊の歌』の加藤自身の記述と食い違っている。

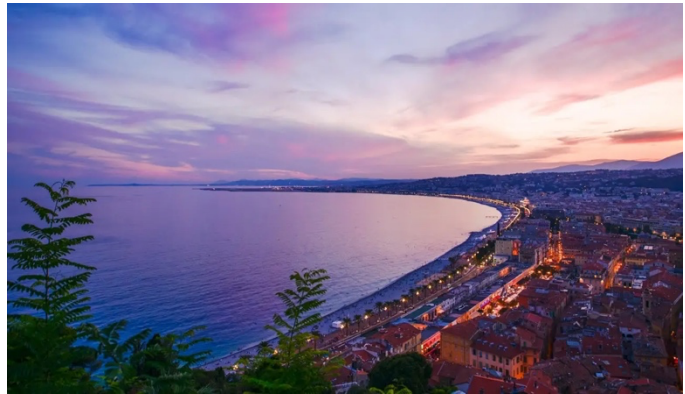
¹¹ 『羊の歌』（正編）の「戯画」の章にも同様のくだりがある。

¹² ルネ・ドゥ・ベルヴァル著、矢島翠訳、『パリ 一九三〇年代』序文、岩波新書、1981 年。

¹³ 鷺巣力、前掲書、363 頁。

のが、後に私の友人となった英国の小説家であった。「何というよい眺めだろう」と私はいい、「同僚文士の顔ばかり眺めているよりはね」と彼はいった。「高い山まで来てみれば、観光旅客と牛と岩」というモルゲンシュテルンの一句を、私はそのとき思い出した。「何のことか」「スイスのことだ」「汝はかの国を好むか」「スイスは美しい国である」と私はアルコス氏の言葉をそのままフランス語でいった、「しかし不幸にしてスイス人が住んでいる！」「しかしかの国は美しいのではなくて、清潔なのだと思う」と彼はいった、「ぼくはイタリアの小さな町一つと、スイスの全体をよろこんで交換するだろう」。彼は度々イタリアへ行くことがあるといい、イタリア語は自由に話せるし、友人も多いのだ、といった。「しかし南仏も美しい」「海岸の観光都市を除けばね」「いや、プロムナード・デ・ザングレを除けば、といい給え」。彼は大いに笑い、少し日本のことを話そうではないか、といった。（『続 羊の歌』、72-73 頁）

- ・ニースの市長は、丘の上の城跡公園にペン会議の参加者を招待した。
- ・テーブルでの会話は、作家仲間の噂話や出版社の内輪話だったため、加藤には退屈だった。
- ・テーブルを離れて庭園を散歩していると、後に友人となった一人のイギリス人作家と出会う。
- ・加藤はイギリス人作家とウィットに富んだ軽妙な会話を楽しむ。



…この会話について、鷲巣は以下のように評している。

＞「何というよい眺めだろう」と加藤がいったのに対して「同僚文士の顔ばかり眺めているよりはね」に始まり、いずれもの返答が、相手のいったことを「その通り」とも「まったく違う」ともいわない。相手の言を承けて、全面否定はしないが、少しひねりを利かせ、そこに批評を加えて、返答する。

「しかし南仏も美しい」に対して「海岸の観光都市を除けばね」といい、「いや、ムロムナード・デ・ザングレを除けば、といい給え」と応じる。エスプリとユーモアに富んだ会話。これもまた「文化の違い」を感じないわけにはいかなかった」¹⁴。

- ・この段落の主たる狙いは、ペン会議で繰り広げられていた会話劇を魅力的・肯定的に描写することだろう。

…第3-4段落で作家たちの会話を「無内容」だと酷評したので、「私はまた、国際ペンの集りをたのしまなかったのではない」と言ってバランスをとっている。

¹⁴ 鷲巣力、前掲書、364-365 頁。

◎第8段落（若い婦人との会話）

そのとき若い婦人が私たちの方へ近づいて来た。「何をしていますのですか」と彼女はいきなり英語でいった、「こんなところにかくれて……」「かくれてはいませんよ」「ごめんなさい、何を話しているのですか。西洋についてですか、東洋についてですか」「なに、どちらでもない」と英国人の小説家は応じた、「観光旅行の話をしていたところです」「ああ、倦き倦きした」と彼女は呟いた。「何に？」——しかしそれには応えずに、彼女はけたたましく笑い出し、急に笑いやめると、挑戦的な口調ではじめた、「文士に、もちろん文士にですよ、全く馬鹿馬鹿しい、何が会議ですか、誰も何にもいっていないでしょう、空虚です、虚栄心以外の何もない、よくも文士がこれだけ集ったものだ、朝から晩まで……」「それははじめからわかっていることだ、厭ならば来なければよかったでしょう」——「そうね、たしかに、来なければよかったのでしょうか」と私が思ったよりもしずかに、ほとんど沈んだ調子で自分にいいかせるように、彼女は相手の言葉をくり返した。しかしそのまま喋りやめるというのではなかった。「この国はいくさをしているのでしょうか、インドシナで。人が毎日死んでいる。それでどうしてこんな会議ができるのか。いくさのことは誰も一言もいわない。高尚で、空虚な言葉だけ。これが文学なら、文学は嘘とごまかしでしょう。これだからアングロサクソンは堪え難い……」——「いや、いくさをしているのは、フランス人で、アングロサクソンではない」と私はいったが、「どっちにしても同じことだ」と彼女は断言した。その大きな眼は夜のなかできらきらと輝き、その話はほとんど支離滅裂であった。しかしそこに全く真実が含まれていないというでもなかった。傍を通りかかった誰かが声をかけたのを機会に、英国人の小説家はその場を立去った。私は突然その日の午後を思い出していた。（『続 羊の歌』、74-75 頁）

- ・ イギリス人作家と話していたところに、婦人が話しかけてきた。
 - …この婦人はイギリス人作家とはもともと知り合いだったということだろう。
- ・ 婦人の発言は、支離滅裂ながらも、何か真実を含んでいるように思えた。
 - …戦争をしている国（フランス）に来たにも関わらず、戦争の話を一言もしないアングロサクソンは耐え難い、と若い婦人は語る。
 - > 戦争をしているのはフランス人であって、アングロサクソンではないので、この発言は支離滅裂に聞こえる。
 - …だが加藤には、次のような発言に何か真実が含まれているように思えた。
 - > 「いくさのことは誰も一言もいわない。高尚で、空虚な言葉だけ。これが文学なら、文学は嘘とごまかしでしょう」。
 - > 第3-4段落で示されていたように、加藤は作家たちの空疎な会話に反感を覚えていたので、女性の発言に共感したのかもしれない。
- ・ 女性の姿を見て、加藤はふとその日の午後のことを思い出した。

…次の段落で描写されるように、加藤はこの婦人を見かけたことがあったようで、そのことを思い出している。
…次の段落は回想シーンになる。

◎第9段落（海辺の女性を思い出す）

それはジュアン・レ・パンの海岸のカジノでのことであつた。私は露台で、身だしなみのよい中年の男女と、水上スキーの曲芸を見物したりしていたが、その露台の端からは、そのまま海へも降りられるようになっていたらしい。海から上がって来たばかりの若い女が、そのとき私のすぐ傍を通つた。その顔には漠然と見覚えがあつたが、何処で会つたのかをはっきりと想い出すことはできなかった。それが彼女であつた。濡れた水着が肌に密着して、彼女の身体のあらゆる線を露わにしていた。張りきつた腿に水滴が光っていた。
（『続 羊の歌』、75 頁）

・加藤はその日の午後、ジュレアン・レ・パンの海岸沿いにあるカジノで、水上スキーの見物をしていた。

…時系列に従って整理すると、その日の昼過ぎにカジノで水上スキーの見学し、夕方頃に城跡公園の宴会に参加したのだと思われる。



・城跡公園で婦人に声をかけられたとき、彼女の顔に見覚えがあつたが、どこで会つたのかをはじめは思い出せなかった。
・だが加藤は、海岸沿いで彼女の水着姿を見たことを思い出す。
…「濡れた水着が肌に密着して、彼女の身体のあらゆる線を露わにしていた。張りきつた腿に水滴が光っていた」。

◎第10段落（女性と宴会を抜け出す）

彼女はアイルランド人で、ロンドンに住んでいた。英国のペン・クラブと事務の上でつながりをもっていたらしいが、そんなことは私にとってどうでもよかった。少なくともその濡れた腿ほどには重要ではなかった。「あなたは日本人でしょう？」と彼女はいった、「日本人はおかしい、なぜ米国の占領に反抗しないのか」。また突然私が小説を書いているのか、詩を書いているのか、一体何をしているのか、といい出した。「あなたが健康ならば、文士、あなたが病人ならば、私は医者である」と私は応えた。「その答えが気に入った」と彼女はいった。「今晚私の部屋に来ませんか」と私は誘つた。「病人だから？」「いや、健康だから」「そうかな」といって、彼女はまたけたたましい声をたてて笑つた。私は彼女と

宴会を抜け出し、丘を降りて、町で自動車を拾った。その間彼女は、強い訛のあるフランス語で、「これは悲しい国である」とくり返していた。「私は私のしていることがわからない」自動車が私の宿の前にとまったときに、私は彼女をもう一度誘った。しかし彼女はどうしても車から降りようとはしなかった。(『続 羊の歌』、75-76 頁)

- ・加藤は海辺で見た彼女の水着姿を思い出したため、彼女の細かい身の上話よりも、むしろ彼女を自分の宿に誘えるかどうかに関心があった。
- …「〔彼女は〕英国のペン・クラブと事務の上でつながりをもっていたらしいが、そんなことは私にとってどうでもよかった。少なくともその濡れた腿ほどには重要ではなかった」。
- …「第二の出発」の最後でも、「生理的には、誰も、女に飢えていた——ろうと思う。私もまたその例外ではなかった」という記述があった。
- ・加藤は女性を自分の宿へと誘うが、けっきょく断られてしまう。

◎第 11 段落（彼女は淡い影のような存在でしかなかった）

その後私はふと知り合ったそのアイルランド人に二度と会ったことがない。会議が終ってニースを離れると、すべてが遠い過去のものとなり、周囲の強烈で濃厚な現実のなかで、彼女は淡い影のような存在でしかなかった、たとえその影がしばらくの間私につきまとい離れなかったにしても。私はニースの料亭の壁に読んだプロヴァンス語の諺を私自身にくり返した、「愛は時を忘れさせ、時は愛を忘れさせる」。しかしそれはまだ愛でさえもなかった。

- ・宴会を抜け出すときには彼女に強く惹かれていたが、ニースを離れると、彼女は加藤にとって「淡い影」のような存在でしかなかった。
- …その女性の影はしばらくつきまとい離れなかったが、その女性を愛していると言えるほどの確かな印象は残らなかった。
- ＞「愛は時を忘れさせ、時は愛を忘れさせる」と自分に言い聞かせた。
- ＞しかしそれはまだ愛でさえもなかった。
- …ニースで出会った女性に関する記述は、本書の「冬の旅」に出てくる「ヴィーン娘」との対比を狙ったものだろう。
- ＞加藤は、ヴィーン娘と一週間過ごした後、「彼女を愛しているということ」に気がつくことになる。
- ＞加藤はヴィーン娘と過ごした過去について以下のように語る。
- ：「その過去は、ヴィーン西停車場で中断されてはいたが、決してそこで終わっていたのではなく、想像することのできるあらゆる未来とつながっていた」。
- ＞時が経つと「淡い影」のような存在でしかなかったニースの女性と、共に過ごした過去が「未来へと繋がっていた」ヴィーン娘が対比されている。

◎第 12 段落

私はパリへ戻るアルコス氏とニースの駐車場で別れて、ひとりで南仏を歩き廻った。私の周囲には、流暢な演説と豪華な宴会の代りに、ゴッホの太陽と広い空があり、ぶどう畑に蔽われた丘と丘の上の町をとり巻く白い壁があった。私は汗をかき、樹蔭で汗をかかわかし、爽かな風が身体中を吹き抜けるのを感じていた。その世界は、光にあふれ、鮮かな色と輪郭の明瞭な形にみちていた。赤い屋根、黄色の壁、緑の樹立、白い石、野原のなかの道は、真直ぐに延び、丘の輪郭は紺青の空を鋭く切っていた。そこには、北仏の灰色の空や、微妙に変化する光線や、流れる霧のなかに見えかくれする樹立、また私が遠く後にして来た大和路の、洗練された中間色や、影とも形ともわかち難く、そこはかたなく漂うものがなかった。微塵のあいまいさも許さず、容赦なく明瞭であり、毫末も色を混ぜず、断乎として原色の一つを択ぶ。そこには、わが胸の底の恨みつらみ、不安や希望や後悔を投影することのできるどんな手がかりもない。私は樹蔭の草の上に疲れた脚を投げだして、ただひとり、古代ローマ人が築いたポン・デュ・ガールの水道を眺めていた。深い谷を横切り、アルカードを重層させたその壮大な構造は、天を摩してそびえている。思えば「春の夜の夢」と「嶺にわかる横雲」とのわかち難く融けあった「新古今集」以来の——いや、「古今集」以来の風景から、それほど遠いものも少かつたろう。（『続 羊の歌』、76-77 頁）

◎第 13 段落

ローマ人の水道は、見る人の思惑とは何の関係もなく、二千年以上もそこにあった。それは私の内側とは少しも係りなく、私の外側にあるものである。またおそらくそれを築いた人間のいかなる感情とも係らずに、外部の世界の——外部の世界はつまるところ感覚的所与であるから——感覚的秩序に属するものである。この南仏の明るく澄んだ空の下では、芸術さえも、「心」や「気持ち」の表現ではなく、いわんや、「個性」の発揮でも、「体験」の告白でもなく、外側の世界に実現された一個の秩序であるほかはなかったのであろう、重層するアルカードから多声音楽の構造まで、またおそらくはポン・デュ・ガールからヴァローリスの画家の焼物の皿まで。もしピカソが皿絵において偶然と戯れていたとすれば、たしかに彼自身の心の気まぐれとではなく、焼物の工程に介入する予想し難い要因と戯れていたにちがいない。心の気まぐれは、ポン・デュ・ガール以来、一度もこの世界に正統の地位を得なかったのではなからうか。ながい間私はひとりでそういうことを漠然と考えていた。その考えはその後私のなかに一種の連鎖反応をおこして、多くの考えを生むことになったのである。（『続 羊の歌』、77 頁）

◎第 14 段落

私はひとり旅の間、ほとんど誰とも話をしなかったし、そのことに満足していた。ニースで一週間も朝から晩まで喋っていたので、他人の話よりも、自分が喋ることに倦きていた。一日中歩き廻り、夜は疲れきって、安宿の寝台で眠った。昼まの私はよほど無愛想な顔をしていたにちがいない。私は自分が育って来た世界とは反対の極にあるもう一つの感覚的世界との対決に、しずかに精根をすりへらしていたのである。(『続 羊の歌』、77-78 頁)